朝鮮出土の磨製石劍

——細形銅劍を模した一群に就いて——

有光教一

一

ここに取扱う朝鮮の磨製石劍は、初めて朝鮮に波及した大陸の金屬文化がいかなる形で朝鮮石器時代人の間に攝取されて行つたかを知る恰好の資料である。朝鮮文化の發達が、大陸の高い諸文明の影響に負う所大である事は言う迄もないが、その長い接觸の歷史の第一章は、大陸から最初に波及した金屬文化に關するものでなければならない。それを代表する遺物が銅劍・銅鉾類であるのに對して、それを受けた朝鮮土着文化を代表するのが磨製石劍である。

最も早く、かような意味を認めて磨製石劍をとりあげ、その型式・分布・出土遺跡・伴出物等に關する研究を進められたのは梅原末治博士・中山平次郎博士及び故高橋健自博士であつて、大正の末に一連の論述がある。[1] 其の後、私は「朝鮮に於ける磨製石劍の形式と分布」について見解を發表した(人類學雜誌　五四巻五號)。それはもとより諸先生の研究の範圍を出るものでなかつたが、私の磨製石劍に對する研究の跳躍台となり、爾後關係資料の蒐集に努める緣となつた。然し間もなく戰爭とその結果により此の研究も中絶せざるを得ないはめとなつた。私は當時朝鮮總督府博物館に勤務していたからである。

昭和廿八年以來、京都大學において梅原博士の朝鮮考古學に關する資料（以下「梅原考古資料」と稱す）の整理に當ることになつた私は、その中に同博士作製の石劍の實測圖・寫眞及び記錄が多數ある事を知り、再び石劍の問題を考え得るようになつた。蓋しフィールドと資料を失つて引揚げて來た朝鮮考古學の學徒にとつて、これ以上の幸運はない。本小篇は右の整理に際し考え及んだところにほかならぬが、最近十數年間に發見された關係資料や、發表された新見解によつて、前の私見を補正し朝鮮磨製石劍の正しい理解に資する事が出來れば幸である。

起草に當り、資料を自由に使う事を許された梅原博士の寛容に對し深謝するとともに、分布圖の淨書その他で西谷眞次氏の少なからぬ援助を受けた事を銘記する。

朝鮮及び日本に分布する磨製石劍の形式分類については、まず梅原末治博士の案がある。梅原博士は石劍を「銅劍の形を石に移せりと認むべき特徴顯著なる」第一種と、「單なる細長き石槍形」の第二種とに大別し、「磨製石劍形式分類集成圖」によつて、兩者を通じてⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの四類に分つことを示された。[2]

次いで故高橋健自博士は右の梅原博士の分類を踏襲し、その「銅劍銅鉾の研究」に於て各類に形式名を與えられた。即ち高橋博士の分類は第一類鐵劍形、第二類有柄式、第三類有樋式、第四類クリス形の四つであつた。これはそれぞれ梅原博士のⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅲに當る。兩博士の分類は、その後多數の新資料が出たにかかわらず、基本的な變改を加える必要なしと言われて今日に及んでいる。

然しこの分類には一貫した基準がない。即ち、あるいは全形により、あるいは部分の特色により分類されている。私は、朝鮮發見の石劍を集めて形式分類を試みた際、右の分類法に據つたところ、高橋博士のいわゆる有柄式の中にも、鐵劍形に相當するものの中にも有樋の例があつて重複し、混亂を招く事を經驗した。またクリス形に該當する石劍は、朝鮮にない事を知つた。そこで別の分類を試み、さきの拙稿「朝鮮に於ける磨製石劍の形式と分布」の中に記して世に問うた。そ

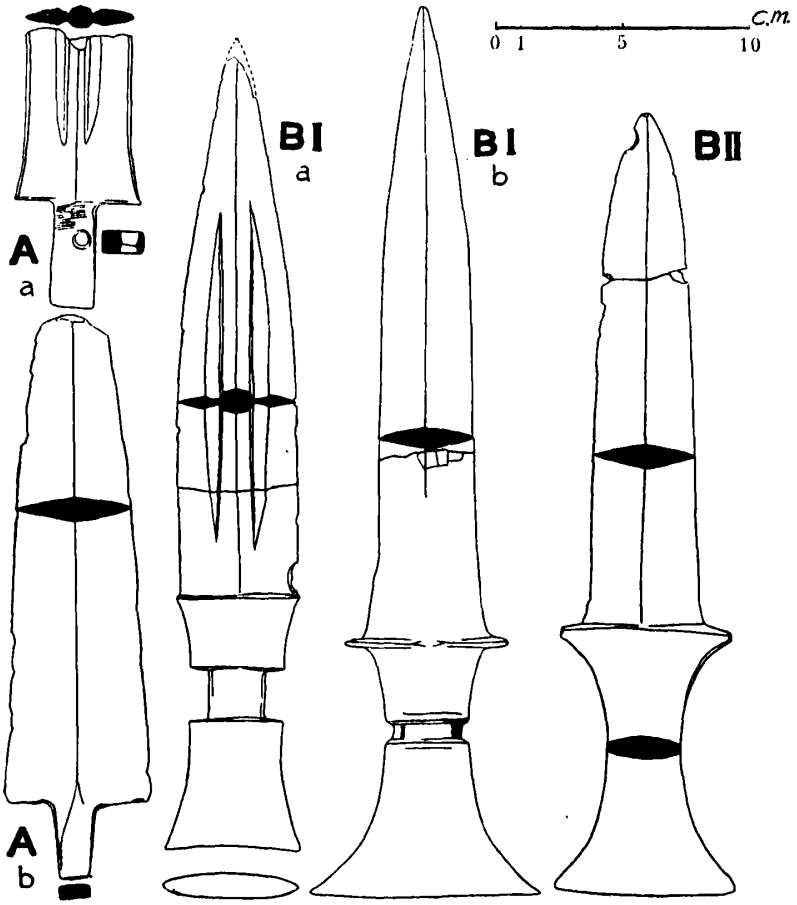
れは基部の形狀によるわけかたであつて、（A）基部に細く短いナカゴを有する有莖式、（B）基部がツカの着裝を象る有柄式、（C）基部を眞直ぐに截りナカゴもツカも作らぬ無莖無柄式、（D）穗部から自然に柄に移行してその間に明確なマチを作らぬ柳葉形とした。

以上のうち、A及びBは明らかに梅原博士の第一種に相當する。卽ち銅劍の形を石に移したことの明確な種類である。Aは莖（ナカゴ）の存在が著しく、Bは劍把（ツカ）の形によつて察知出來、ともに樋を彫るものがあつていよいよ疑いを存しない事以下に述べる通りである。これに對し、C及びDの形は、そのままでは銅劍との間に直接のつながりを認め難く、而も出土數が前二者に比して甚だ寡少である。本篇では、まず、朝鮮出土の劍形石器の大部分を占めるA及びBをとりあげて、その形の由來と分布の問題を考察する。

右に述べた梅原考古資料の整理に從事中、私はA及びBの石劍の形式に更に亞形を設ける必要を感じ、次の如き新たな分類を試み、それを拙稿「南朝鮮土着文化の考古學的考察」（史林 三八卷六號）中に援用した。すなわちA形式――ナカゴ式――を劍身に樋を刻んだAa及び樋のないAbに分けた。つまりAaは有樋・有莖式であり、Abは無樋・有莖式である。またB形式卽ちツカ式を、まずツカの部分の中央に溝を抉つて上下二段に作つた形のBIと、そのようなくびれを作らぬBIIの二つに分ち、更に身に樋を有するaと樋のないbとを區分して、BIa――有樋・二段柄式、IBb―無樋・二段柄式、及びBII―無樋・一段柄式とした。この場合BIIには有樋のBIIaに當る例が皆無なので、すべてBIIbという事になる。ここでも形式分類の根本を基部の形におくプリンシプルには變りなく、樋の有無と柄の形により亞型をたてたわけである。

A・Bともに銅劍の形を模倣したことの確かな石劍のグループ卽ち梅原博士の第一種に屬するものであるから、銅劍の形を最も忠實に寫した形のものを分類の出發點とせねばならぬ事は當然である。が、それにはまず祖形となつた銅劍の形がいかなるものであつたかの檢討から始める必要があろう。何故ならば石劍の形の成立に影響を與えたと推定される銅劍卽

ち東北アジアに分布する銅劍の種類は單一でないからである。夫等の銅劍の中には劍把付きのものもあるが、劍身のみで發見される事の普通な細形銅劍もあつて、別に作られた柄や、或いは鞘のごとき、所謂外裝の形もかえりみられねばならない。ナカゴ式とツカ式との二型式に更に樋の有無と柄の形狀による亞型を設けた私の右の分類は、そうした祖形との關連を辿るのに役立つと信ずる。



第一圖　銅劍を模した石劍の形式

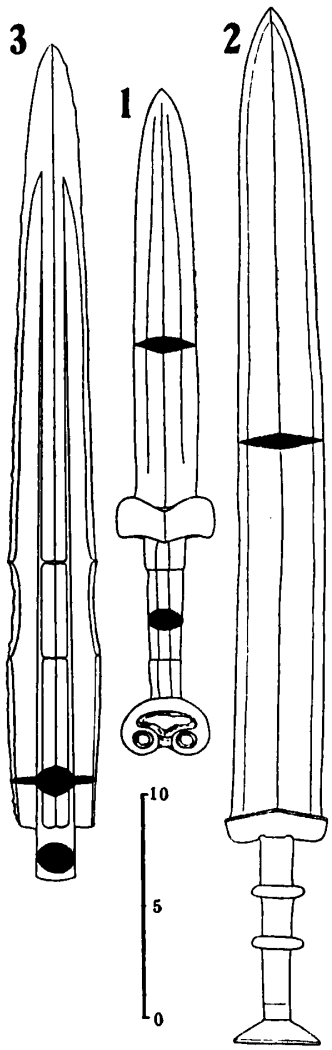
Aa　：平安南道大同郡秋乙美面美林里美林里

Ab　：平安南道大同郡秋乙美面美林里

BIa：慶尙北道慶州郡慶州邑神堂里

BIb：忠淸南道扶余郡扶余面佳增里

BII：忠淸南道扶余郡扶余面佳增里



第二圖　銅劍3種形式圖
（西谷眞次君圖）

1）南鮮發見と傳えるスキート・シベリヤ式短劍（梅原考古資料 No.1870）

2）平安南道發見と傳える支那式銅劍（梅原考古資料 No.1695）

3）慶尙北道慶州部外東面入室里發見細形銅劍（梅原考古資料 No.2009）

二

朝鮮半島を含むアジア東北部に分布する銅劍は、梅原末治博士指摘の如く、凡そ三種類に分たれる（「朝鮮古文化綜鑑」第一巻綜說三）。第一は所謂スキート・シベリヤ系統の短劍であり、第二は所謂支那式銅劍すなわち「考工記」の桃氏劍、また第三は所謂細形銅劍である。この三種類の銅劍の形と、私のA・B兩型式の石劍の形を比較すると次の樣な類似が見られる。

第一のスキート・シベリヤ系統の短劍は身と柄とを一成の鑄造とし、身の斷面は扁平な菱形を呈する。卽ち身には棒狀の鎬なく、又樋を設けない。その劍把は幅が狹いが、劍鼻と把頭を斗出させて「工」字形の柄部を作る。全長概ね三十糎以下である。かような形態上の特徵を最もよく表現した石劍がBIIであることは明白であり、BIbと雖も亦近似の形と言うを得よう。嘗て鳥居龍造博士が朝鮮の磨製石劍を以て基づくところ土耳古式劍にありと主張されたのは型式論に關する限りまことにもつともと言わねばならない。

第二の支那式銅劍は、スキート・シベリア系短劍同樣、身に棒狀の鎬なく、樋を作らず、兩刄に稍々目立つた稜が沿うがやはり扁菱形の斷面を呈する。劍把は概ね身と共鑄で細い棒狀であり、その中間に算盤珠形の節を二つ設け、把頭は圓

盤形に作る。從つて劍把のこのままの形に似た石劍のツカは存在しないわけであるが、この劍把に紐を卷いて把握に便ならしめた原狀を傳える銅劍が知られているので、その平面形を考えるならばBIIは勿論、BIbの石劍の祖形とする理由は充分と言えよう。特に鋒先の兩刃が圓味をおびた輪郭の類似は著るしく、亦BIbの石劍の二段になつた把部の形の由來も說明がつく。

第三の細形銅劍は短いナカゴをつけた劍身のみが發見される場合が最も普通である。然し少數ではあるが、別鑄の劍把金具又は石製・銅製の把頭飾を伴つた發見例④があつて、元來別に作られた劍把に挿入されていた事がわかる。事實ナカゴが頗る短小で劍身のみでは利器として役に立たぬことは明瞭である。その劍身には兩面に高い鎬があり、刃との間に樋を通し、複雜な形の斷面を呈する。樋を作つたA式石劍卽ちAaが最も忠實にその特徵を寫している事に異論はないであろう。同時に劍把を持つB式石劍中、有樋のBIaが、把に裝備された細形銅劍を模倣した形である事も容易に認められよう。

以上要するに、柄を象り身に樋を持たぬBIbとBIIとは、スキート・シベリア系短劍或いは支那式銅劍に類似し、ナカゴを象るA式特に樋をつけたAaと、ツカを具え樋をつけたBIaとは細形銅劍に最も近似する。然しこれは全く形態の比較だけによつて到達した結論であつて、三種の銅劍の分布狀態を省みると右の類似關係が、必ずしも祖形とその倣製品の關係にならない事を知る。

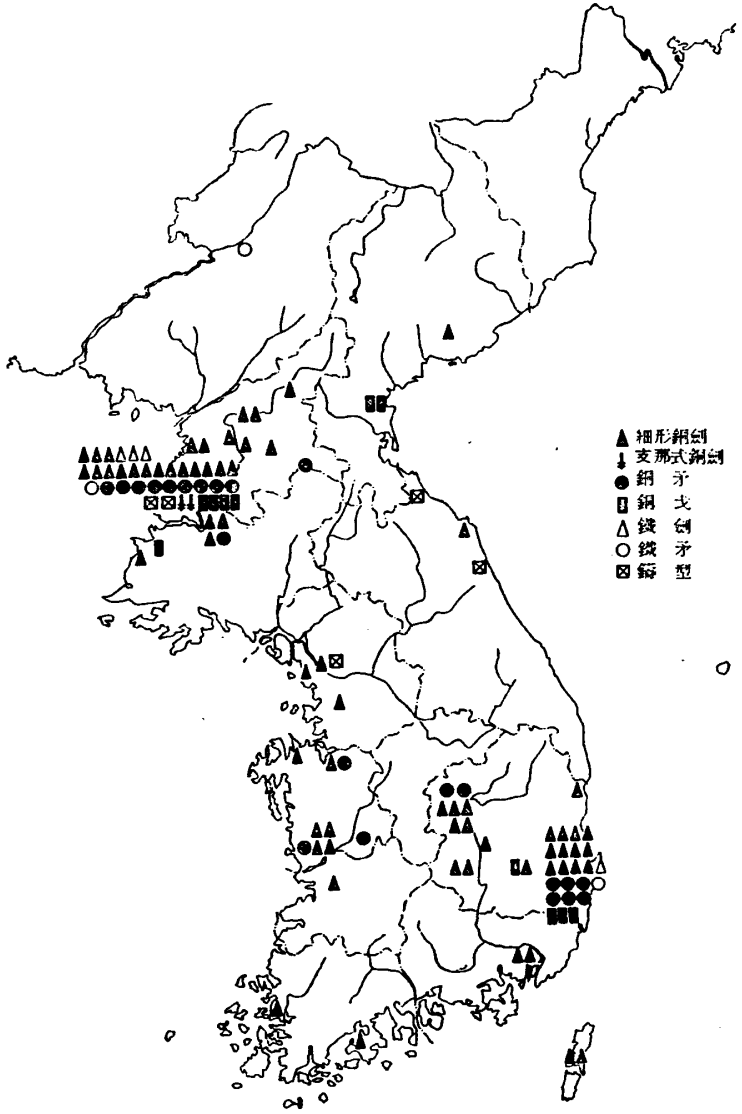
三

第一のスキート・シベリア系短劍は、東北アジアでは所謂蒙疆長城地帶に最も多く河北省にも及ぶと言うが、朝鮮半島からの確實な發見例は一つも知られていない。舊朝鮮總督府博物館にただ一本南鮮出土と傳える此の式の銅劍があり、梅原博士等の「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」（朝鮮總督府大正十一年度古蹟調査報告　第二册）にも紹介されてあるが、その記述にも見

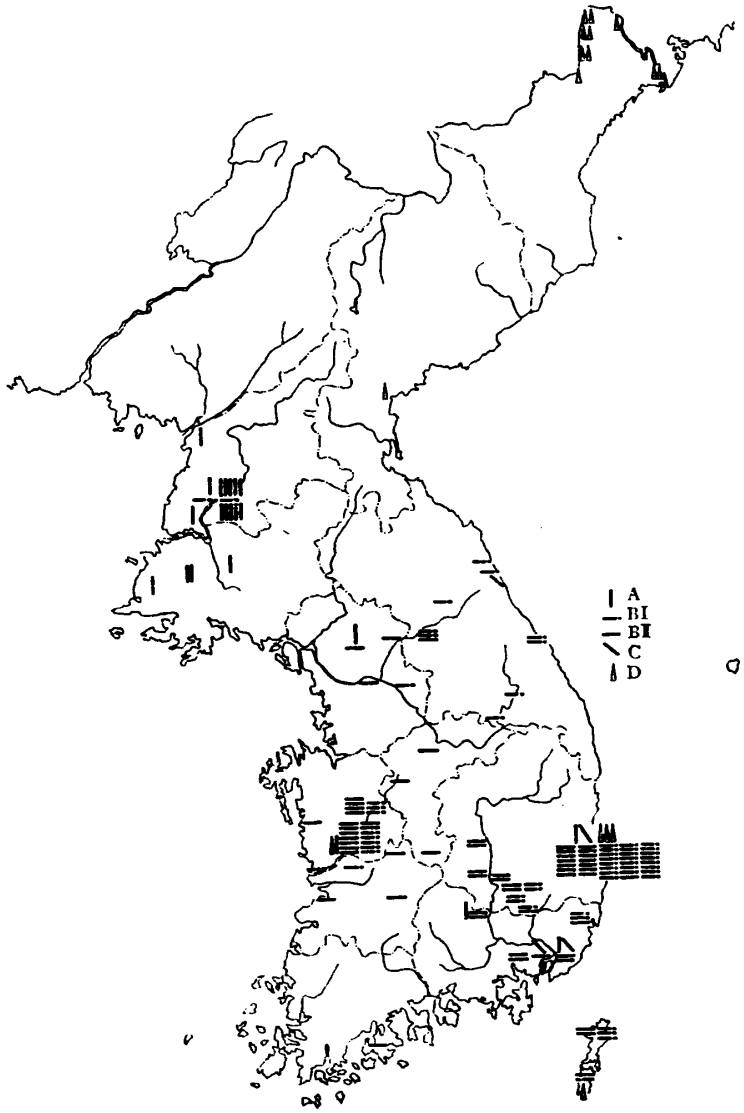
える通り、古物商からの購入品であるので、その所傳は信用し難い。また第二の支那式銅劍が周末から戰國・秦の時代にわたつてシナ中原に行われ、漢代にも及んで引續き鐵製の長劍として普及した事は周知の如くであるが、此の種の銅劍にして朝鮮半島出土と傳えるものは僅か數例にすぎぬ。最も確實な例と言えば、例の秦戈と伴出した元平壤中學藏の金銅飾柄付銅劍一本にすぎず、鮎貝房之進舊藏の同式銅劍は出土地不詳、ただ平安道發見と云うのみであつた。[8] 卽ちスキート・シベリア系短劍も、支那式銅劍も、共に朝鮮半島における分布が微少であり、特にスキート・シベリア系短劍の存在は疑わしく、是等が朝鮮石器時代人の石劍の形態を規定したとは思えない。

然らば第三の細形銅劍は如何であろうか。細形銅劍には華北出土の所傳を持つものも知られているが、主たる分布圈は南滿洲・朝鮮・沿海州の一部及び日本の西部に亙る。而して朝鮮出土の確證あるものを「梅原考古資料」によつて數えると六十六點にのぼり、朝鮮半島出土の銅劍は殆んどすべて細形銅劍とその系統のものである事を知る。卽ち細形銅劍は朝鮮半島の初期金屬文化を代表する諸利器中、最も卓越したものであつた。この事實は第三圖の分布圖によつて一目瞭然であろう。そして大同江流域（二十八本）、錦江流域（五本）、洛東江流域（十一本）及び慶州附近（十二本）に集中的に分布する狀態が明らかである。漢の武帝以後樂浪郡の疆域に入つた大同江流域に多いばかりでなく、漢の直接支配するところとならなかつた、つまり漢の領域外に殘つた地域にも優勢に分布する事實は注目に價する。そして特に指摘しておきたいのはその分布の密疎が、石劍の分布の濃淡に相應ずる事實である。第三圖と第四圖を比較すれば容易にわかるように、石劍の分布圖が描くパターンは細形銅劍のそれにほぼ一致する。

以上の如く、分布論的に觀察すれば、朝鮮の石劍との密接な關係が推定される銅劍類は、支那式銅劍やスキート・シベリア系短劍ではない。ただ細形銅劍のみである、との結論に到達せざるを得ない。



第三圖　初期金屬製利器及鋳范の分布圖



第四圖　朝鮮出土石劍分布圖

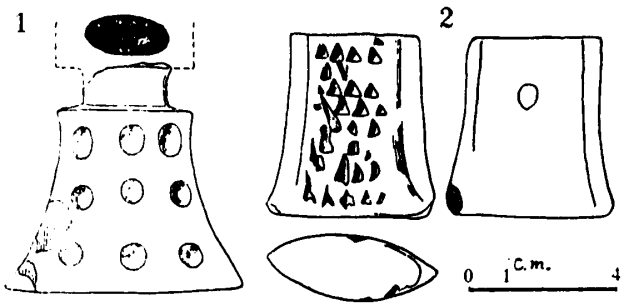
四

銅劍の分布狀態を吟味すると、細形銅劍のみが朝鮮の石劍の成立に關係があつたとの結論に到達せざるを得ない事は、以上述べた通りである。果して然らば朝鮮の石劍の形式變遷をあとづけるに當つて、その細形銅劍の形を最も忠實に模した石劍、卽ちAa及びBIaがひとつの出發點となる。

細形銅劍、それも今日我々が手にする形での細形銅劍の特徵は、その樋の形のみならず一直線のマチから直角に細いナカゴを作り出す基部の形にもある。これらの特徵が明確に出ているAaは、七本中六本が大同江流域に分布し、他の一本が慶州附近の發見となつている。而も滿洲發見のナカゴ式石劍はマチとナカゴのけじめが明確でなく、一直線をなすマチと直角をなしてナカゴを作る細形銅劍の特徵が發揮されていない。むしろ所謂滿洲式銅劍の基部に近い形であり、且つ銳い彫りの樋を見ない。かような滿洲出土のナカゴ式石劍に比較すると、今問題にしているAaは忠實に細形銅劍の特徵をとらえたものであり、右の分布狀態はその製作が大同江流域に興つた事の示唆となろう。BIaは、Aaに劍把を着裝した形である。身の部分はAaの身と異るところなく、細形銅劍を忠實に寫した事が、その樋に偲ばれる。身のみ細形銅劍を忠實に寫し乍ら、劍把は別種のものを模倣するとは考えられないから、そのツカ部は必ずや細形銅劍の劍把を象つたものであろう。況や前述の如く最も類似した劍把のスキート・シベリア系短劍及び支那式銅劍は分布區域を異にするにおいておやであつて、分布圈を距てた銅劍の而も把部のみの形を採用したとは解し難い。

現存する、細形銅劍の劍把金具の形は、このBIaのツカの形とは多少趣が違う。卽ち原田淑人博士等が牧羊城の一埋葬址から檢出された一具の劍把金具[6]、我が山口縣大津郡向津具發見の銅劍に造付の把部[7]、或いは平壤府附近の出土で同地の黃澳氏藏の鐵劍に着裝された劍把等[8]の如き「工」字形のもので、その中央が急に太さを增す長鼓形である。

ひろく細形銅劍の出土狀態を檢するに、その大多數は短いナカゴの劍身のみで出土し、右の如き劍把金具を伴うことはむしろ甚だ珍らしい。刺殺の兵器である細形銅劍は短いナカゴのままでは實用にならない。必ず別に作つた柄に挿してあつたが、それが木や竹の如き腐蝕し易い材料であつたために、今に傳わらぬと解すべきであり、杏仁形の鐔金具や結紐形の石製又は銅製の把頭飾のみを伴う細形銅劍の發見例[9]は、亦、劍把の有機質部が消失してしまつた事を物語る。それら消失した劍把がいかなる形であつたか。右に擧げた現存の劍把金具がその一型式であつた事は勿論である。然しその發見數が細形銅劍の總數に比し極めてまれな上に、次に說く他の形の把頭金具も存在するのであるから、細形銅劍の劍把の形式をこれに限る事は出來ない。



第五圖

細形銅劍の今は消失した劍把の一つの形式がBIaの劍把によつて表現されているのではなかろうかと、如上の分布論から推定するのであるが、而もその把頭に當る部分に類似の金具が知られており、且つその鐔に當る部分の形と同趣の金具も出ているにおいてはなおさらにその感を深くする。夫等は同樣に細形銅劍等に伴つて出土したもので、右の推定は、より一層眞實さを加える。

そのひとつ、卽ちBIa石劍の柄頭に當る部分に似た金具と云うのは、平安南道大同郡龍岳面上里出土の一括遺物群中に含まれていた靑銅製品で、第五圖2はその實測圖である。卽ち「朝鮮古文化綜鑑」第一卷の圖版第一六中64に當る。實測圖によつて知られる通り、斷面杏仁形の筒狀で底に擴つた趣はBI式石劍の柄頭の形に似る。「朝鮮古文化綜鑑」の編著者と同樣、私は劍把頭飾とするに躊躇しない。尤も共存の細形銅劍に附屬していたものかどうかは、別に十字形劍把頭飾銅製品も存在するのでにわかに決し難いが、それはこの一括遺物群が最初偶然に發

見されたからでやむを得ない。[10]

而もこの銅製劍把頭には、實測圖で明らかなように、その一面に三角形の陰刻を連ねた裝飾文様がある。その文様が鮎貝房之進氏舊藏の傳洛東江流域出土鈴付鐃の全面を飾つた鑄沈めの鋸齒様文[11]を想起させ、所謂古代北方系文物の痕跡に連なるものを感じさせるのみならず、次に擧げるBI型石劍の劍把部の裝飾に、共通の趣を添えている事は興味深い。

元來磨製石劍には文様を彫刻したものが殆んど無い。然るに梅原考古資料のなかには把部に文様を刻んだ石劍が、數點ある。そのうち右の青銅製把頭の文様に似た趣のものは、二個の慶尙北道慶州發見の破片（第五圖1はそのひとつ）である。圖示の破片は明らかにBI式の柄頭であつて、片面に圓い小さい窪みの列を刻んで裝飾とする。他の破片は樋を通した劍身の一部を存し、マチ部に連なる劍把の上半で、此の部分の片面に同様の飾を刻む。圓と三角の差はあるが、前記上里發見の把頭金具に見た陰刻文に通じる。而もその陰刻文はいづれも一方の面にのみあつて、他の面は素文である。江原道高城郡梧桐面巨津里山上發見の一石劍の柄頭を飾る鋸齒狀刻線[12]も亦片面だけであつた事を想起するならば、この種の劍は平面觀に重要な意味を持つていたという事になろう。かかる點をも考慮するならば兩者の近親性を肯定してもよかろう。

BI型石劍の把の形を考える場合、無視することの出來ない特徴は、嘴狀に突出した劍鼻卽ち鐔に當る部分、或いは柄頭の頂邊である。劍把の側邊は、從つて、鋭く內彎する。ところがかくの如き特色ある輪郭を持つた銅製或いは銀製の鞘裝具が、細形銅劍或いは鐵劍と伴出し、また裝置のままで發見された事がある。いま著しい二三の例を擧げれば次の如くである。

慶尙北道慶州郡內東面九政里において細形銅劍及び銅鉾に伴つて見出された「鞘金具」一個（「朝鮮古文化綜鑑」第一卷圖版二八 136）。

平壤貞柏里採土場の一埋葬址から出たと傳える柴田鈴三舊藏の「鞘裝備金具」四個。銅劍一本に伴う（「朝鮮古文化綜鑑」

第一卷圖版三七　174)。

平壤附近發見の鐵劍の「鞘裝具」一組。黃澳氏藏。及び昭和十七年平壤石岩里第二一九號墳において檢出された同樣の鐵劍の「鞘裝具」一組（「朝鮮古文化綜鑑」第一卷圖版三七　173)。

是等は鞘金具と認められているとは言えその特徵ある形は、BI型石劍の劍鼻及び把頭に當る部分と明らかに類似し、共通の趣好を否定出來ない。從つて、有機質の材料で作られた爲に今に傳わらぬ細形銅劍の劍把にもかくの如き形のものが採用されていたと推定する事も可能なのであつて、少くともBI型石劍の把部の形を以て、當時の細形銅劍の劍把の一形式を象つたと見做すのは不當ではないと思う。

Aa型石劍の分布が大同江流域に集中していたのに對し、BIa型卽ち劍把付の有樋石劍の分布はひろがり、確實なものについてのみ言うも、大同江流域一本、錦江流域一本、慶州附近二本、洛東江流域一本であつた。これに基部を缺いてナカゴ式かツカ式かわからない有樋の石劍片を加えると、更に平壤府對岸の土城里一本、黃海道二本、慶州附近四本、慶尙南道の巨濟島に一本が增加し、分布の範圍がひろがる。そして慶州附近に特別に稠密な狀態がはつきりする。慶州附近は南鮮において細形銅劍の分布が最も著しい地域である。細形銅劍を模倣した事の一番確かなAaとBIaの石劍の分布が以上の如くであるから、細形銅劍の形を石に移す風習が大同江流域から南端の海岸迄一樣に見られ、その流行は大同江流域に始まり漸次南鮮に及んで、錦江流域、慶州附近で最もさかんであつた事を知る。而も此の事は他の形式の石劍の分布との比較により一層明確となる。

五

前述の如く、スキート・シベリア系短劍及び支那式銅劍の分布が消極的である爲、朝鮮の磨製石劍の形の成立に關係が

ないとすれば、Ａｂ・BIｂ・BIIの三形式卽ち穗部に樋を刻まず、したがつて細形銅劍との間に形態上緊密なつながりが明確でない石劍は、如何にしてその形をえたであろうか。それについて次の三通りの解釋が考えられる。

其一はＡａ及びBIａの劍身にあつた樋が省略されたとする解釋。凡そ倣製品にあつては、周知の如く、原形の細かい形乃至は面倒な手法はこれを省く傾向が强い。Ａａの樋を省けばＡｂ、BIａの樋を省けばBIｂである。そして同じＡａ又はBIａのうちに樋を淺い細い線で表現したものがあり、そういう石劍を仲介として考えるとａからｂへの移行は自然であつて、細形銅劍を祖形として出發した石劍の樋が漸次省略されてゆき、軈てＡｂ・BIｂ・BIIの形式が出來上る過程が理解出來る。

其二はＡｂをＡａの樋を省略したものとする點で前者と同じ解釋だが、BIｂとBIIとは劍把を具え鞘に收まつた細形銅劍の模倣とする。細形銅劍は、つきさす利器であるから相當重い柄をつけてバランスをとる必要があつた。現に重い把頭飾を伴う細形銅劍があり、前述の如く、元來別に作つた把に挿入されてあつたと思われる。そしてそれが拔身のままで佩用されたとするよりは、木とか皮とかで作られた鞘に入つた形が一般であつたとするのが自然である。平壤貞柏里出土一括遺物中の黑漆塗木鞘を伴う銅戈の發見（「朝鮮古文化綜鑑」第一卷圖版第六）は、それの示唆となろう。また我々の想像を超えた異樣の形ではあつたが、前述の黃澳氏藏平壤附近出土鐵劍は鞘に入つていた（同上圖版第三七）。そして何よりも細形銅劍に伴つて鞘金具を認むべき金具（同上圖版第三七、第二八）が發見されているから、我々が鞘に入つた細形銅劍を推定するのは少しも不合理ではない。朝鮮における細形銅劍の鞘がいかなる形のものであつたか、完形を直接に知るすべはないが、右に擧げた二三の例のほかに、この際、大陸の所謂北方系銅劍に時に見られる鞘金具、或いは遠くペレスポリスの浮彫に表現された劍の形等を連想する事が許されよう。ともあれ最も自然な形はやはり細形銅劍の輪郭をとり、菱形の斷面を持つBIｂ・BIIの穗部の形に近い。かくてBIｂ・BIIは、劍把を裝備し、鞘に收まつた細形銅劍を石で象つたとする推定が成り立つ。なおＡｂについては、細形銅劍のナカゴをそのままにして鞘に收める道理がない上に、一直線のマチに直角に突出したナ

カゴの形がAaと同じで細形銅劍の基部の趣に一致するので、Aaの樋を省略したものとする解釋には問題は殘らぬであろう。

其三は鐵劍を模したとする解釋である。Abは鐵劍身を、BIbとBIIとは夫々劍把付鐵劍を祖形としたとする解釋である。既に知られている如く、朝鮮に初めて入つて來た金屬文化は、青銅利器と共に鐵製利器を持つていた。銅劍・銅鉾の類が屢々鐵製利器を伴い、または鐵銹を帶びて發見された。[13] 從つて細形銅劍を倣製した有樋の石劍があると共に、鐵劍をモデルとした石劍が他方にあるとしても少しも不思議でないとするのである。むろんこの場合BIbとBIIの中には鞘入のもの、拔身のままのものの兩方が考えられよう。

以上三つの解釋は夫々理由があるので、いずれを否とするか決し難い。私は既に有樋の石劍によつて、細形銅劍を祖形とした系統の存在を確認した。それから發展してゆくと見るならば、其一又は其二の解釋に從うのが當然である。且つ、最初の金屬文化は、既に鐵製の利器を知つていたに違ないが、現在知られている限りでは、なお銅劍、銅鉾等の青銅利器の方が盛んであつた事は、假令鐵製品は腐蝕し易いとは言え、發見數の多寡によつて明らかである。發見數から言うと、金屬文化流入當初は、細形銅劍が最も多數であつた。それの模倣に出發した事に疑ない石劍の流行ではあつたが、問もなく石劍から石劍に形を移すようになつた。次に述べるBIb・BIIの盛んな製作はこのようにしてなされた。その次第はそれ等の間に多くの退化形式の作品が存在することによつて推察される。

六

A・B兩形式の石劍の流行が細形銅劍の模倣に始まつた事は以上繰返し述べた通り、充分理由がある。然しその流行は一樣なものではなく、兩形式及びそれぞれの亞型は發見數に差があり、分布狀態を異にする。いま梅原考古資料その他に

よつて私が確認し得た發見數と分布狀態とを要約すれば、概ね次の樣な結果になる。尤もこれが朝鮮發見のA・B形式の石劍のすべてを網羅した數だとは主張し得ないのであつて、我々の目にふれずに散佚した數は少くないであろう。けれどもこれによつて全體の趨勢を知り得るとして誤りないと信ずる。

細形銅劍の樋の形を忠實に象つたAa・BIaは、朝鮮の磨製石劍のうちの僅かな部分にすぎない。いま明らかにA・B兩形式に屬する石劍の數を求めると百六十七本である。然るに、前述の如くAaは七本、BIaも七本、これに基部を缺くのでAかBIかが不明のもの八本を加えて漸く二十一例にすぎない。分布は一應半島の北から南にわたるが、Aaの流行が大同江流域に偏していた事は間違ない。

これに對しBIbとBIIとは右の磨製石劍の總數の八十六パーセントを占め、その代表的形式とするにふさわしい。まずBIbは五十本。そのうち二十六本が慶州附近出土である。其の他、洛東江流域（九）、錦江流域（六）に分布の地方的中心を見るが、未だ大同江流域からは發見されていない。またBIIはすべて六十七本あつた。錦江流域（十八）、洛東江流域（十六）慶州附近（十五）に集中的に多いが、この分布も大同江流域に及んでいない。

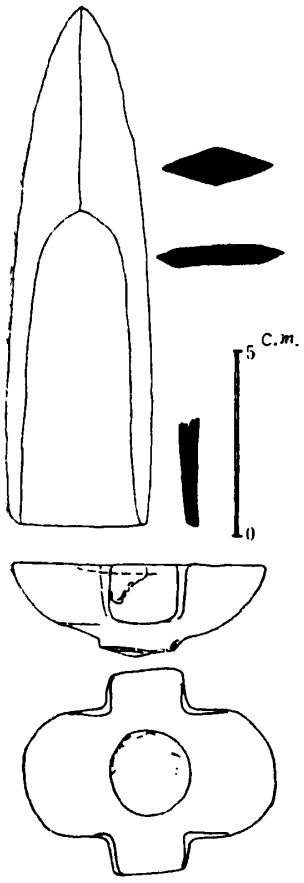
以上の發見數と分布狀態から考えられるA・B兩形式の石劍の流行は次の如きものとなろう。まず細形銅劍を、それも劍身のみを正確に石でまねた石劍の製作が大同江流域に興つた。同時に劍把をつけた細形銅劍の形も同じ地域で始まつた。銅劍を模した石劍は滿洲でも作られていたが、大同江流域のそれは最も正確に細形銅劍の形態上の特色をとらえている。その作風は、大同江流域にとどまらず、銅劍・銅鉾の波及に伴つて漢江下流域から南鮮各地に傳わり、南海岸の島にもその痕跡をのこす。ところが既に大同江流域においてその樋を省略した。Ab型の石劍が作られていたが、石劍製作の風習が、漢江下流域を南に越えて擴ると共に、劍把をつけた形であつて樋を省略したか或いは鞘入の形を象つたところのBIb及びBIIの石劍が作られるようになつた。そしてAaとBIaとは忽ちこれらの流行に壓倒されるに到つた。BIb及びBIIの流

行は南鮮において長く續き、多くの作品をのこしたのであるが、そのうちには退化形と認むべきものが少くない。卽ち石劍の形を石で模作する事が次から次へと行われたに相違ない。

銅劍が代表する初期金屬文化が進んだ經路は、大陸から先ず西鮮地區に入り、漢江下流域を渡つて南鮮に普及したと推定される。その西鮮地方は間もなく漢の版圖に入りその進んだ文明に屬したので、石劍の製作は伸びなかつた。之に對して漢の直接支配からは自由であつた南鮮では、却つて石劍の製作に獨特の形式を發達させた。BIb・BIIの石劍の密な分布と多くの退化形の存在とが、その證據である。それが、南鮮獨特の碁盤形支石墓の石室又は石棺內から屢々發見され、古新羅によつて繼承された南朝鮮土着文化の一標識に數えらるべき事は、別に論じた通りである（拙稿「南朝鮮土着文化の考古學的考察」史林　三八巻六號）。

以上のA・B兩形式の石劍は、出土の數・分布の狀態・形式の由來に鑑み、朝鮮磨製石劍の正統派と呼ぶにふさわしい。これに對し冒頭の分類に擧げたD形式は、分布圈が豆滿江下流域に離れている事と形の懸隔の點とで別系統に屬せしめらるべきである。從つて、細形銅劍との關連を特に問題とした本小稿では論究の對象から除外した。

またC形式については既に言及した通り[14]、細形銅劍におけると同樣、結び紐形石製把頭飾を伴つて發見された例がある。



第六圖

これは形態だけからは、劍の先端とも、また長い柄の鎗の先端とも考えられるが、慶尙南道東萊郡北面長箭里の一支石墓からの出土例（第六圖）[15]は石劍として用いられた事を示した。その出土狀態を私は發見者の及川民次郎氏から直接聞いた事があり[16]、又梅原考古資料中にもその記錄がある[17]。卽ちその支石墓は碁盤形で、石

劍はその長方形の石室のほぼ中央、主軸の方向に沿つて床上にあつた。重要な點はその基部から約一尺を距てたところに劍把飾の十字形石製品が見出され、兩者は一直線上にあつて、もと一具の鋩先と劍把飾であつたと考えられた事である。かような狀態は、同樣の把頭飾を伴出した細形銅劍の場合と共に、腐蝕してしまつた劍把の存在を告げる。その形狀は今日知ることが出來ないが、C型式のうちに、細形銅劍と同じ形制に屬したもののある事は明らかで、それはA・B兩型式の石劍と同列である。右の發見例は早く亡びた劍把を示唆するとともにB形式石劍が、その樣な劍把の一形式を象つたものとした前述の推定を援ける。

七

以上の石劍は、その土地の石を材料とし、製作に當つて特別に進んだ技術を必要としない。伴出物の多くは磨製石鏃であり、稀に伴うことがある石庖丁・石斧・土器等と共に、石器時代的な遺物であつて、遠隔地から材料又は製品を輸入する必要はなく、特殊な技術も要らないものである。夫等は石器時代遺物散布地からも發見されるが、最も著しいのは支石墓・箱式石棺・積石塚等の埋葬址からの發見である。これについては既に論じたことがあるのでここでは觸れない。[16]

これに對して細形銅劍はどうかというに、勿論單獨出土の場合が多いが、伴出物があれば銅鉾・銅戈をはじめ鐵劍・鐵鉾等の金屬利器、或いは青銅製を主とする馬具・車輿具の類を伴う。是等は稀少な材料と進步した技術によつて初めて製作可能な遺物である。これらを携行していた人々の社會を考えるならば、採鑛・鑄造に關する特殊な技術者を養い得るような、且つ材料又は製品の遠距離運搬が出來るような社會である。石劍を作つていた人々の社會よりも、經濟的段階が遙かに高かつたと云う事は疑がない。細形銅劍を祖形として發達した朝鮮出土の石劍は、銅劍と同時代か又は後に續くものであつた筈であるに拘わらず、考古學的には兩者共存の事實が殆んど無い。それは、夫々を產出した社會が別個の生活

基盤に屬していたからであろう。單に共存の事實がないばかりでなく、埋葬址の如き重要な遺蹟の構造が對蹠的に異なる事をも指摘せざるを得ない。銅劍・銅鉾を主とした一括遺物の發見例中、埋葬址と認められたものは、石劍を出す埋葬址とは構造を異にし、漢族風な木槨であつたと言われている。百五十點を越える確實な朝鮮發見の石劍中には、かような埋葬址からの出土例は全く無い。また逆に支石墓・組合箱式石棺・原始石室等の構造から銅劍類を出した事例も稀である。かくの如く銅劍類を出す遺蹟乃至は銅劍類につながる關係遺物の組み合せは、石劍を出す遺跡乃至は石劍を中心としたコムプレックスとの間に截然たる區別が見られる。前者は侵入して來た金屬文化を、後者はこれを受けた土着文化を代表し、平行し乍ら互に融合しなかつた時期があつた事を示す。かように兩文化の對立を强調するが、後者が全く青銅器の鑄造に無關心であつたと言うつもりはない。一般の細形銅劍を前者のものとしても、なおかつ全南高興郡豆原面雲岱里支石墓群内の一石室内にあつた仿製と認められる銅劍、江原道高城郡梧岱面巨津里散布地の銅劍の鑄型、同道通川郡通川邑鉢山遺跡の銅鏃の鑄型など、漢の直接支配下に入らなかつた南鮮においても青銅利器の鑄造が行われた證據は確かにある。けれども西日本における盛んな仿製品或いは鑄型の發見數に比較するならば、それは頗る低調であつたと言わねばならない。西日本の平形銅劍・廣鋒銅鉾に相當するものは、朝鮮ではむしろ以上述べた磨製石劍にほかならぬ。（一五五六・三・三〇）

註

(1) 梅原末治「鳥取縣下に於ける有史以前の遺跡」鳥取縣史蹟名勝地調査報告第一

中山平次郎「九州北部に於ける先史原史兩時代中間期間の遺物に就て」考古學雜誌　八卷三號。

高橋健自「銅鉾銅劍考」。

(2) 梅原末治　前註に同じ。

(3) R. Torii; Etudes Archéologiques et Ethnologiques. Populations préhistoriques de la Mandchourie méridionale (Journal of the College of Science, Tokyo Imperial Univ.: Vol. xxxvl, Art. 8. 1915) p. 66.

(4) 是等の發見例を一括して說明した著述は、

梅原末治・藤田亮策の「朝鮮古文化綜鑑」第一卷がある。

(5) 藤田亮策・梅原末治・小泉顯夫「南朝鮮に於ける漢代の遺蹟」大正十一年度古蹟調査報告　第二册　一五〇頁・一一六頁。

(6) 原田淑人「牧羊城」東方考古學叢刊　第二册

(7) 島田貞彥・小川五郎「長門國向津具久津出土の飾柄銅劍」史林　一

七卷二號。

(8) 梅原末治・藤田亮策「朝鮮古文化綜鑑」第一卷圖版三七及第七圖、圖版三八。

(9) 黃海道黑橋面遺跡・忠淸南道扶餘郡窺岩面檢卜里・慶尙北道慶州郡內東面坪里竪穴式石室（「朝鮮古化綜鑑」第一卷に據る）。

(10) 此の詳しい調査記錄は樋本龜次郎「平安南道大同郡龍岳面上里遺蹟調査報告」（朝鮮總督府博物館報第六號）であるが、今手許にない。「朝鮮古文化綜鑑」第一卷　圖版一五、一六參照。

(11) 藤田・梅原・小泉、前註(5)圖版第三九(一)。

(12) 澤俊一「鎔笵出土の二遺蹟」　考古學　第八卷四號。

(13) 黃海道黃州郡黑橋面出土の銅劍・銅鉾等の一括遺物群中に多くの鐵銹を着けたものがあり、また慶尙北道慶州郡外東面入室里一括物中の銅鉾銅劍にも鐵銹の附着が甚しかつた。後者は鐵斧・鐵劍の破片を伴出し、(5)參照）また最近慶尙北道慶州郡內東面九政里でも銅劍・銅鉾類と共に鐵刀・鐵斧・鐵鎌等が發見された（金元龍「慶州九政里出土金石併用期遺物について」歷史學報　第一輯）。

(14) 有光敎一「朝鮮に於ける磨製石劍の形式と分布」　人類學雜誌　第五四卷第五號。

(15) 有光敎一「南朝鮮土着文化の考古學的考察」　史林　三八卷六號。

(16) 梅原考古資料 No. 1004.